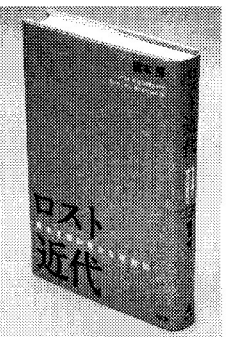


橋本 努 著

本書は、現代社会を「ロスト近代」と規定し、それをいかに変革していくかを説いた意欲的な著作である。著者の分析によれば、1990年代の半ばごろから、世界の社会・経済は急激に変化し始める。その要因は、時代の風潮であった新自由主義とグローバルゼーションに含まれていた矛盾が露呈したことである。かつては、進歩・自由・正義といったいわゆる「大きな物語」を掲げた「近代」があり、そのあと個人の欲望に支えられ



て、多様な価値が同時に追求され、また他人に見せびらかすための「記号的消費」が目標とされていた「ポスト近代」の時代があった。その「ポスト近代」を動かしていた「欲望」という駆動因が失われて、社会は別の方向に動き始め、われわれは「ロスト近代」の時代にいる。

「ロスト近代」は、収入が減少し、失業者が増加し、「学歴に見合う職業がへりつつある」時代である。人間相互のつながりが希薄になり、学校や職場でのいじめが増え、老人の孤独死

現代社会の変革を説いた意欲作

評論家 宇波 彰 評

が頻発する。日本では自殺者が毎年3万人に達している。これが「ロスト近代」の実状である。しかし著者は、けっして悲観的ではなく、つねに現代人の「潜在能力」の開発に期待して、その実現のために、若者の就労を促進する方策、子どもに対する支援策など多様なプランを具体的に提案する。

著者は現代を「知識人の言説が通用しなくなり、代わって当事者の言葉が威力を発揮するようになった」時代だとしているが、これは現実の状況を記述するだけで、それに対する「思想」を語ることのない今日の哲学の貧困を批判した意見である。しかし著者は、「社会はエネルギーッシュに変革されていく」という確固とした思想的な立場を維持している。そのため、本書は不安定な「ロスト近代」の分析でありながら、読者を明るく方向へ導こうとする力作になっている。

(弘文堂 2310円)



はしもと・つとむ 1967年、東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科課程博士号取得。現在、北海道大学大学院教授。主な著書に『社会科学の人間学』『帝国の条件』など。